

象をよく要を摘んで纏められ、殊に一々の出典を比較的詳細に擧げてあるのは斯界の研究者にまつて裨益する所が少くない。唯だ強ひて希望を云へば第五編中の服飾界の動搖及洋裝採用の章に收めてある武家服制概要特に上下とその種類の項はやはり社會の階級と服飾定型の章中に收めてほしかつたことである。(四六版三五九頁、東京雄山閣發行、價二・六〇)〔松野〕

●海南小記

柳田 國男著

收むるこのころ海南小記、與那國の女たち、南の島の清水、炭焼小五郎が事、阿遲麻佐の島の五篇のうち、海南小記二十九章は大正九年十二月十九日より翌年二月九日まで著者が旅行された臼杵宮崎と北洲南東海岸より薩南諸島を經、沖繩群島に及び、更に先島列島に到る間の見聞録であつて、南國の風景文物風習は勿論、島々村々に残つて居る傳説やら古老の物語やら、或は村人の物語る珍奇談を夢のやうな美しい筆で叙述したもので、さかく單調に陥り易い旅行記をこれ位に面白く流暢にものせ

られたのは著者の筆致の自由な事の外に、郷土に関する深い理解と厚い同情とが然らしめたものである事は疑のない事であらう。殊に私は右敢當に關する著者の觀察に同意を表し、與那國の女たちの生活、炭焼小五郎の物語に思はず引き込まれて一氣に讀まされてしまつた事を白狀する。所々に地圖を挿入して讀者をして著者と共に其の境地にある思をせしめ、少ないながらも寫眞版を以て説明を補ふて居るのは、此の種の著書としては是非かくあるべき事の範を示したものである。(四六版三七九頁、東京大岡山書店發行、價參・貳〇)

●郷土會記錄

柳田 國男編

編者や新渡邊博士を中心として明治四十三年秋に創立され大正八年末頃までに六十何回かの會合を開いていろく郷土に關する物語や調査や研究が行はれた郷土會の記錄で、主として柳田氏の手記によつて綴られたものであるらしい。郷土會例會の記事の間に、伊豆の白濱と丹波の雲原、三本木村與立の話、豊後の由布村、湯坪村と

火燒輪和、大山及び三峰の村組織、代々木村の今昔、刀鍛冶の話、富士講の話、隅田川の船等其席上で報告された廿編の講話が收められて居つて、或は土俗學の上から、或は人文地理學の方面から、或は社會史の方面から、それ〴〵他には求められない面白い材料が含まれて居る。説明を補ふために地圖が挿入してあるのは、何よりも喜ばしい(四六版二六四頁、大岡山書店、價二・五〇)(以上中村)

●堺市史講演集

本書は昨年十一月堺市役所に於て同市史資料展覽會と同時に開催せられた同市史講演會の講演集であつて文學博士新村出氏の「堺港と歐洲人」及び文學博士三浦周行氏の「歴史上の大堺」の二篇を收め、巻尾に附録として同市史資料展覽會の經過概要を載せたものである。「堺港と歐洲人」は堺港と南蠻貿易、堺に於ける基督教布教の狀態、江戸文學に反映せる堺の對外關係の三節に分ちて堺の對外史を述べ、「歴史上の大堺」は堺の發祥地、堺の平和的發展、南朝と堺、堺の爭奪戰、對明貿易と堺、堺市民の

努力、堺の繁榮、堺の自治體、堺の文化、近世の堺の十節に分ちて繁盛時代の堺の狀況を述べたもので、共に豊富なる資料に依つて各自得意の方面から觀察考究せられた頗る興味の饒かな講演である。加ふるに其の表装は瀟灑紙質も優良で、一見快感を與へる。圖版には一五八五年ヴェネチヤ刊日本布教年報に見えた堺の記事と南蠻屏風足利時代堺港の圖とが載せられてゐる。(菊版一〇六頁、堺市役所發行、非賣品)

●國史教授資料(第一輯)

名古屋温故會は從來逐次地方の史料及び史蹟の繪葉書を發行し來りしが、今又國史教授資料第一輯を頒てり。本輯に收むるところは足利義教織田信長の畫像長篠合戰繪屏風、清洲古城圖の繪圖を始めとして織田達勝及び豊臣秀吉の制札、信長及び秀吉の朱印狀徳川家康の皆濟狀大石良雄の書狀の文書、新井白石自筆の折筭柴の記の圖書秀吉小牧陣使用の器物、清洲城址、津島神社本殿、平手政秀父子の墓に至る十五枚の寫眞版にして一々簡傑なる